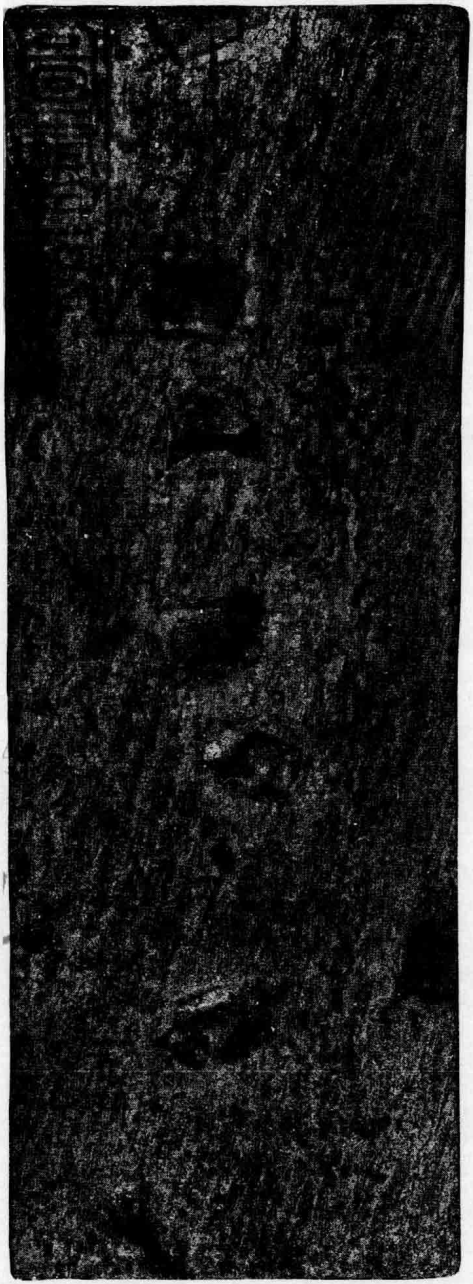
そこのみにて光輝く

佐藤泰志

そこのみにて光輝く

佐藤泰志



河出書房新社

佐藤泰志（さとうやすし）
昭和二十四年、北海道生まれ。国学院大学卒。
著書に『きみの鳥はうたえる』（河出書房新社）がある。

そこのみにて光輝く

一九八九年三月五日　初版印刷
一九八九年三月一五日　初版発行

著　者　佐藤泰志
装　丁　高専寺赫
発行者　清水　勝
発行所　株式会社河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
電話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

©1989 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4―309―00552―7

目次

第一部　そこのみにて光輝く　5
第二部　滴る陽のしずくにも　93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そこのみにて光輝く

第一部　そこのみにて光輝く

潮の匂いが鼻孔をついた。背後の海鳴りが歪んで聞こえる。鼓膜が馬鹿になっている。陽光が頭上から射し、それが拍車をかけている。男の声も掠れて届く。よく喋る男だ。

パチンコ玉をな、と男はいった。

「両耳に挟んでおけばいい」

実際、指で器用に両耳から一個ずつ玉を取りだしてみせる。黄色い歯を覗かせて、てのひらで転がす。金属音が、肉の厚いてのひらの窪の底で響く。亀裂が入ってそこだけ黒ずんだ海岸通りに男はそれを捨てた。

盛夏だ。光が万遍なく行き渡っている。この光景は俺の気持にしっくり来る、と達夫は思う。肩を並べて海岸通りを渡った。

夏草に踏み込んだ。草と枯れかけたハマナスの灌木に蜘蛛が巣を張っている。昨夜の雨で水滴が巣にこびりついて、揺れながら光った。湿っぽい草がサンダルばきの裸の足首に触れる。草ずれが皮膚を刺した。

「こんなハマナスなんてよ、潮にすぐやられる。市役所の奴らは何を思っているのかな」

男が灌木を蹴った。蜘蛛の巣が揺れ、水滴が震える。

「あんた、名前は」

不必要なことを達夫は聞いてしまった。短い頭髪と、毛穴から汗のつぶを滲みださせている太い首を見る。仕事は見当がつく。大工か左官か土方か、その種の職業だ。夏場だから不況でも仕事はあるだろう。大工ならたいした腕の持主ではない。せいぜい、型枠大工の口だ。深入りしたら危うい男だ。そのぐらいの見当はつく。もっとも俺だって。達夫は苦笑した。

「大城というんだ。大城拓児。あんたは」

男が振向かずにきき返す。大城というのはこの土地では珍しい名前だ。達夫は名前を名のった。

「そうか。サトウ・サイトウ、馬の糞か」

「親が違えば馬の糞でもなかった」

へっ、と男はいった。振返って、人を威圧するほど剝きだしになった眼で見る。お前にも親がいるのか、とぶ厚い唇を動かしていう。死んだ、妹はいるがこの土地にはいない、と答えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

他人に隠すことは何もない。海鳴りはだいぶ遠のいた。拓児が視線を細めて達夫を見る。それから舌をすぼめ、唾液を遠くへ上手に飛ばせて見せる。何か喋るかと思った。ありきたりの慰めの言葉は必要がなかった。煩しいだけだ。だが拓児は、そうか、といってちょっと首を振る仕種をした。

海鳴りは遠のいたが、潮風は雨あがりの翌日らしく、膜のように皮膚に粘り着く。湿気は少ない町だが、浜のあたりは風向きで違った。拓児の言葉に毒はなかった。思ったことはそのまま口にするタイプだ。

「どこまで行ったらメシにありつける？」

達夫はのこのこ男について来たのを後悔して話をはぐらかせた。友達は不必要だった。あっさり気を許してしまった。おまけに名前まで名のりあった。あのパチンコ屋の世界だけに留めておく関係で充分だったはずだ。

「すぐそこだ。少しぐらい我慢しろよ」

拓児は市が建設した六棟の真新しい高層住宅を指さす。達夫は内心驚いた。この辺一体はバラック群がひしめき、周囲は砂山だったのだ。子供の頃には近づかなかった。どの家でも犬の皮を剝ぎ、物を盗み、廃品回収業者や浮浪者の溜り場で、世の中の最低の人間といかがわしい生活があると聞かされていた。それを市が根こそぎ取り壊した。観光客のための美観とゴミ焼却場建設のために、代替え用に造った住宅だ。砂山はコンクリートで埋め、申訳け程度にハマ

ナスを植えた。それからこの地にゆかりの若くして死んだ歌人の像を建てた。それも観光客のためだ。

しかし、拓児の言葉を早呑み込みしたのにすぐ気づいた。

「けた糞悪い。あれを見ると胸がむかつく。誰があんなものを建ててくれと頼んだ。それで俺らが、喜んで何でもいうことを聞くと思ったか」

俺は米つきバッタじゃないんだ。拓児はまくしたてた。とまらなかった。達夫はいってみた。

「俺は市役所の人間じゃない」

「市役所の人間は町の人間だ。町の人間は市役所の人間というわけだ。腹の中は同じだ。そうだろ。ニッポンが戦争に敗けてから、俺らの爺様や親父どもはここに住みついた。山背風の時は砂だらけでよ」

達夫は丸首の下着を着た拓児の背中を注視した。この季節の陽光のように渦巻く感情が怒りの形を取っていた。汗が下着に染みている。足元で踏みつけられる草の音が一段と高まって響く気がする。

「焼却場だって、ここに持ってくればどこからも文句は出ないと思っている。実際、大半の連中はあの建物に入った。でも、俺は犬じゃない。俺の家族もよ」

達夫は夏草を指に巻いた。何も考えていなかった。拓児の半袖の丸首シャツに覆われた筋肉質の背中から吹きだす棘のような感情に、返答のしようもない。その必要もあるまい。どうせ

受付けないだろう。

「それでどう変った。何が変った」

何も変っていない、変ったと思いたい奴がいるだけだ、と達夫はいいかけてやめた。かわりにきいた。

「町の人間が敵なら俺もだろう。なぜメシに誘った」

食堂でひとりで済ませてもよかったのだ。

「おまえは違う」

「俺も町の人間だ」

「違う。ライターをくれた」

指に巻いた草を捨て、達夫は声をたてて笑った。何がおかしい、と拓児はまだ怒りのくすぶる声できいたが、達夫は黙って笑い続けた。単純な男だ。そう思うと警戒心が強まった。その後でわずかに恥じた。達夫は拓児の後を歩きながら自分の齢を考えた。三十にあと二ヶ月で手が届く。この男に深入りせずにすます方法はいくらでもある。頭に入れておいたほうが無難かも知れない。だが今日は今日でいい。それにしても憎めない奴だ。

草はらを出た。アスファルトの火照りがたち込める。滅多に車も通らない道だ。高層住宅のほうに曲った。焼却場と煙突がゆるい上り坂の上に見える。煙突からの煙は陽で薄く見える。高層住宅の前には、焼却場の熱を利用した銭湯があった。道が急に埃っぽくなった。

拓児の家は銭湯の路地を入ったところにあった。バラックで板壁がところどころはがれていた。青いナマコ鉄板を打ちつけて補修してある箇所もあった。低い屋根のトタンも錆びて、一、二枚めくれている。陽に押し潰されそうになって見えた。

潮に晒されたタイヤのないリヤカーや、魚を入れる木箱や乾燥した流木が、家の横に積んである。丸太が二本立っていて、紐が渡してあった。女物の赤い派手な下着と、浜で拾ってきたらしいコンブが、四、五本、干してあった。

軒下には高山植物の小さな鉢が何十と並べてあった。種類はわからなかった。拓児の両親のささやかな愉しみかもしれない。どの高山植物もよく手入れされていたが、どの種類も同じに見える。

「帰ったぞ」

拓児が硝子戸をあけて、湿った薄暗いたたきに入った。返辞はなかった。

「遠慮するな。あがれ」

促されるままに達夫は拓児と並んでサンダルを脱いだ。畳も湿気を含んでいて、足裏に粘ついた。俺ならいちもにもなく、あの高層住宅に入る、と達夫は思った。拓児は家の奥に、姉ちゃん、いないのか、と叫んだ。達夫は外に干してあった女物の下着で、女房がいるのだろうと思っていた。

「大声を出すな拓児。爺さんが眠を覚ます」
破れた箇所に流行歌手のポスターや写真を張った襖の向うから、年寄りの女の嗄れ声が聞こえた。拓児は舌打ちをした。
「親父が眠を覚まして困るのはあんただけだ」
達夫の存在など気にかけないように拓児がつぶやく。襖をそっとあけて老婆が出て来た。青っぽい洗いざらしのカスリの部屋着をはおっていた。喘息が悪化して肺を痛めつけられ、息を引き取った時の母親を思いだした。あの時、妹は今の夫とふたりで、まだこの町にいた。何年、母とふたりで暮したろう。三年か、四年かだ。
突然たずねたわびを達夫は口にした。老婆は胡散臭そうに達夫を見た。それで達夫は、軒下の高山植物を、ああいうものは珍しいのだろう、といってみた。馬鹿馬鹿しい、あんなもの、と老婆はいい、板壁に背をもたせてにやついている拓児に、いつまでもいい齢をして子供で、と叱った。
「刑務所の友達を連れて来たのか」
「やめてくれよ、母ちゃん。堅気の男だ」
どうせそんなところだろうと思っていた。母親は首を振った。また嘘をついて、といいた気だった。濁った老人特有の眼でもう一度しげしげと達夫を見た。
「おい、外に食いに行こう」

達夫は、畳に坐って足を投げだしている拓児のズボンを引っ張った。
「少し待てよ。何か食うものはないか」
拓児はだだっ子のように怒鳴った。一体、齢はいくつぐらいだろう。三十一か二だろう。家は陽が射さず薄暗かった。パチンコ屋や路上で見るより老けて見える。
老母の出て来た部屋で、フィラリアに患った犬のような唸り声がした。達夫は思わず溜息が出そうになった。老婆が艶のない唇に指を一本立て、拓児に向って眉をひそめた。長く、短く、断続的に響く唸り声に達夫は耳をそばだてた。大変だな、婆さんも、と拓児はからかうように喋った。
「下の世話をするのも。あれで親父はなかなか」
「拓児。あんたいいかげんにしてよ。他所様の前で」
左側の襖からだしぬけに女の声がした。若くはないが張りのある声だ。
「姉ちゃん、まだ寝てたのか。メシが食いたい。友達も連れて来たからふたり分頼む」
襖をあけて、黒のスリップ姿の女があくびを噛み殺しながら出て来た。達夫は居ずまいをただして頭を下げた。女はこんにちはといった。
「あんた、本当に拓児の友達なの」
「本当も嘘もあるかよ」
「拓児にきいちゃいないわよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com